

「甲斐のくろまる」の栽培管理の手引き

山梨県オリジナル品種ブランド化推進会議

「甲斐のくろまる」(「ピオーネ」×山梨46号(「巨峰」×「巨峰」))は、早生で着色が良く、食味が優れる巨峰系4倍体品種である。栽培管理については、これまで果樹試験場の栽培・研究等から明らかになった特性に応じ、次の点に留意する。

○留意すべき特性

若木のうちは、粗着果房になりやすい。これは、年により開花前に落蕾が発生すること、「巨峰」より花穂が小さく花蕾数が少ないことなどによると考えられる。樹齢が若いと、この傾向が特に強くなるため、以下のポイントに留意して着粒の確保を最重点に管理を行う。



写真1 「甲斐のくろまる」の花穂 「巨峰」の花穂

◎高品質安定生産のための重要ポイント1

- ①優良な花穂を確保するため、充実した中庸な結果母枝を多めに残す。
- ②発芽率の向上と落蕾の軽減のため、定期的なかん水に努める。

○整枝・せん定

優良な花穂を多く確保するため、樹形にこだわり過ぎず充実した中庸な結果母枝を多めに残す。結実が始まると「巨峰」、「ピオーネ」よりも樹勢が落ちついてくる傾向が見られるので、切りつめ程度は短くし、結果母枝は多めに残す。発芽率が高く中庸な新梢が揃う樹相に導くことで玉張りが向上し、良果房が生産できる。なお、「巨峰」、「ピオーネ」に比べ樹冠拡大は小さいので、植付け本数は10a当たり10本程度を目安とする。

○発芽率の向上

若木のうちは樹勢が強いので、主枝延長枝については水あげ直前に芽キズ処理を行う。また、強めの結果母枝には、表を参考に発芽促進剤を処理する。

表1 発芽促進剤による発芽率の向上

薬剤名	使用時期	使用濃度	使用方法	注意点
シアナミド(CX-10)	2月上旬～2月下旬	10～15倍	散布(150～200L/10a)または塗布	樹勢の弱い樹では、芽枯れの発生があるため注意する。
刈ッ青	2月上旬～3月上旬	原液	塗布	

○かん水

発芽率の向上と落蕾の軽減のため、春先からかん水を行う。生育期全般を通して、土壌が極端に乾燥しないように定期的なかん水に努める。

○芽かき・新梢誘引

芽かきは次のとおり3回程度に分けて実施する。

1回目は、展葉2～3枚時に不定芽、副芽、基芽を中心にかく。

2回目は、展葉5～6枚時に新梢の勢力を揃えるように、芽かきを行う。

3回目は、展葉7～8枚時に誘引と合わせて、混み合っている部分の新梢、結果枝基部で徒長的に生育している新梢等をせん除する。

○ストレプトマイシン剤の処理

無核果率を向上させるため、満開2週間前から開花始め期にアグレプト液剤1,000倍を散布または浸漬する。

○開花前の花穂の整理

開花期に40cm未満の弱い新梢はカラ枝とする。樹勢と新梢の伸長程度に応じ整理する。

◎高品質安定生産のための重要ポイント2

- ①房づくり時の花穂長は4cmを超えないようにする。
- ②結実確保と果粒肥大促進のため、開花直前～開花始めに新梢先端の未展葉部を摘心する。

○房づくり

- ①花蕾数が「巨峰」より少ないため、整形した花穂が短すぎると着粒数が不足し、長すぎると花穂先端が花ぶるいを起こしやすい傾向があるので、房づくり時（開花始め）の花穂長は3～4cmとする。
- ②房尻を摘むと支梗が横に伸びて、密着した円筒形の果房になりにくいいため摘まない。
- ③生育旺盛な新梢は、花ぶるい防止のため、開花直前～開花始めに新梢先端の未展葉部を摘心する。
なお主枝延長枝は、樹冠拡大を図るためにこの時点での摘心を行わず、展葉枚数15枚を確保してから摘心を行う。

◎高品質安定生産のための重要ポイント3

1回目ジベレリン処理の時期が遅れないように注意する

○着粒安定のためのフルメット処理【若木や前年度に花ぶるいが問題となったほ場】

若木や前年度に花ぶるいが問題となったほ場では、着粒安定を図るため開花始めに（一、二輪咲き始めたらずぐに）フルメット5ppm(10mL/2L)を花穂(花房)に浸漬する。これは、ほ場内で開花が確認され次第すぐ実施する。園全体の房づくりを仕上げからでは処理時期が遅れてしまうので、花穂整形前に房先4cmを花穂(果房)浸漬し、その後に房づくりを行う。

○第1回目ジベレリン処理

第1回目ジベレリン処理は、ジベレリン25ppm(2錠/2L)液にフルメット液剤を5ppm(10mL/2L)になるように加用して、満開～満開3日後の花穂を順次処理する(ひろい漬け)。花冠をかぶったまま内部で開花している場合が多いので(写真2)、1回目のジベレリン処理が遅れないように注意する(写真2の花穂は満開時の状態)。

なお、開花始めに着粒安定のためのフルメット5ppm(10mL/2L)の処理を行った場合は、ジベレリン処理を25ppm(2錠/2L)の単用処理とする。



写真2 満開時の花穂
(花冠が着いたまま開花)

◎高品質安定生産のための重要ポイント4

花カスが残りやすくサビ果が発生しやすいので、1回目ジベレリン処理後に花カス落としを徹底する。

○花カス落とし

花冠や雄ずいなどの花カスが果粒に残る場合は、サビ果や傷果の原因になるので、1回目ジベレリン処理後に花カス落としを行う。なお、この時期の果梗は折れやすいので注意する。

○第2回目ジベレリン処理

第2回目ジベレリン処理は、満開10～15日後に実施する。ジベレリン処理は25ppm(2錠/2L)の単用処理とする。

○摘房

第1回目ジベレリン処理から摘粒までに、着粒状況や新梢の勢力を確認しながら、早生の特性を最大限に活かすために、1新梢1果房を基本に整理する。

○摘粒

①着粒数が少ないので残す果粒の見極めをしっかりと行い、正常な果粒を残すように心掛ける。

②目標果房重350～400gの場合

摘粒時の軸長：5～6cm 粒数：30粒程度

目標果房重500gの場合

摘粒時の軸長：7cm 粒数：35粒程度

③基本的には房尻をつかい上部支梗を切り下げて軸長5～7cmに調整するが、房尻が花ぶるいした場合には、房尻を切り上げる。

④着粒数が少ない場合は、下向きや上向きの果粒も残し、目標果房重を確保する。

4粒×2段

3粒×3段

2粒×5段

1粒×3段



写真3 摘粒後
(粒数30粒)の果房

○収量調節の目安

基本的には、種なし巨峰に準じる。

目標収量を10aあたり1,400kgとした場合

果房重400g：3,500房/10a

果房重500g：2,800房/10a

◎高品質安定生産のための重要ポイント5

棚面が明るい場合は、クラフトカサ等を用いて日焼け防止に努める。

○袋かけ、カサかけ

袋は白色袋を用いて、直射日光が当たる部分は日焼け防止のため、袋の上からクラフトカサ等をかける。カサのまま管理する場合は、乳白のカサを用いるが、袋の管理と同様に、直射日光が当たる部分は乳白のカサの上にクラフトカサ等をかける。

○摘粒終了以降の新梢管理

- ①新梢が混み合い棚面に暗い部分があれば、誘引の見直しを行う。副梢の発生は少ないため基本的にはせん除する必要はないが、棚面が暗くなっている場合は4～5枚程度残してせん除する。
- ②ベレーゾン（果粒軟化期）を迎えても伸長が止まらない新梢は摘心を実施し、枝の充実を図る。

◎高品質安定生産のための重要ポイント6

着色先行であるため、食味を確認してから収穫を開始する

○収穫の目安

- ①収穫始めの目安は、種なし紫玉、種なし巨峰の山梨県青果物標準出荷規格に準じる。
着色：品種固有の色沢を有し、果梗周辺まで完全に紫黒色に着色
糖度：17.0度以上、
酸度：pH3.2以上
- ②着色が先行する傾向があるので早もぎに注意し、糖度17度以上の果実を収穫する。
- ③果樹試験場（標高：450m）での収穫始め（糖度17度に到達した日）は8月上旬であり、「巨峰」より一週間程度早い。なお早場産地等では、「巨峰」と同時期となる事例もあるため注意する。



○病害虫防除

果樹病害虫防除暦「巨峰系4倍体品種」に準じて防除を行う。

写真4 目標とする密着果房

○肥培管理

基肥については、種なし巨峰・ピオーネに準じる。若木で樹勢が非常に強い場合は施肥を控える。

○短梢せん定栽培・ハウス栽培の適応性

短梢せん定栽培では、花穂は着生するが果粒が粗着傾向であることや、果実品質が劣ることから導入しない。またハウス栽培についても、房持ちや着粒が悪いため導入しない。

本資料は、これまでの果樹試験場における試験栽培・研究に基づいて作成したものです。各指導機関の指導を受けたいうえでご活用下さい。

問い合わせ先：果樹試験場、各農務事務所、JA営農指導課

作成 平成26年12月
改訂 令和6年3月